



日本記者クラブ
記者会見

法の支配から国民の安心感、そして和解へ

アウンサンスーチーさん
ミャンマー(ビルマ)国民民主連盟党首

2013年4月17日

日本を27年ぶりに訪れたミャンマー(ビルマ)のアウンサンスーチー・国民民主連盟(NLD)党首が記者会見し、あわせて13の質問に答えた。

日本の若者の印象から始まり、以下のように幅広いトピックについて語った。少数民族との和解、法の支配の確立、大統領への意欲、憲法の改正、軍事独裁政権の考え方、日本の援助、テインセイン政権の改革、議会の実績、行政に従属する司法、全勢力の間の信頼、農業、雇用の創出、教育、隣接する中国・インドとの関係、ロヒンギヤ、イスラム教徒。そして最後に、国名はミャンマーかビルマか。

アウンサンスーチーさんへの関心は高く、330人が出席し、会場の日本記者クラブ10階ホールは満員だった。

司会： 小栗 泉・日本記者クラブ企画委員(日本テレビ報道局政治部担当副部長)
代表質問： 杉尾秀哉・日本記者クラブ企画委員(TBSテレビ報道局解説室長)

同時通訳： 澄田美都子、大野理恵(サイマル・インターナショナル)

日本記者クラブ Youtube チャンネル
<http://www.youtube.com/watch?v=uzS56VRjfkQ>

©公益社団法人 日本記者クラブ

司会：小栗泉・企画委員（日本テレビ報道局政治部担当副部長） ただいまから、アウンサンスーチーさんの記者会見を始めます。

皆さん、もうよくご存じだと思いますので、簡単にご紹介をさせていただきます。

アウンサンスーチーさん、27 年ぶりに、この間の土曜日（4 月 13 日）に来日されました。東京だけではなくて、80 年代半ばに研究者として過ごされた京都も訪問されています。

1988 年に国民民主連盟（NLD）を結成、1989 年以降、これまでに合わせて 3 度、通算 15 年にわたり、軍事政権により自宅軟禁を余儀なくされました。

1991 年にはノーベル平和賞を受賞されています。去年 6 月、受賞から 21 年目にしてノルウェーで受賞演説をされたのは記憶に新しいところです。

2010 年 11 月に自宅軟禁が解かれ、民政移管後の昨年 4 月に行われた議会の補欠選挙で当選されました。

きょうは、これまでの日本滞在の印象のほか、お国の民主化の進展の具合ですとか、国会議員としての活動などについて、お話を伺いたいと思っています。

会見の進め方ですが、まず初めに短くスピーチをいただこうと思っています。その後、質疑応答は二部構成で、まずは代表質問、そして会場の皆様からの直接質問、という形で進めていきたいと思っています。

私は司会を担当いたします、クラブ企画委員で日本テレビの小栗と申します。代表質問は、クラブ企画委員で TBS テレビの杉尾秀哉・報道局解説室長です。

それでは、早速、アウンサンスーチーさん、よろしく願いいたします。

なんでも質問してください 私の答えはお気に召さないかもしれませんが正直な答えです

アウンサンスーチーさん ありがとうございます。本日は、日本のプレスの皆様、そしてプレス以外の皆様の前で、このような機会を与えていただき、感謝しています。27 年ぶりに来日がかなって大変喜んでおります。私にとっては特別な経験となりました。なぜなら一般の日本の国民の皆様が大変私を歓迎して下さり、また、過去 24 年間、ビルマで達成しようとしたことに温かいご支援を下さったからです。

本日は、主に皆様のご質問にお答えしたいと思っていますので、あまり長々とスピーチすることは差し控えさせていただきます。意見交換を積極的に行いたいと考えております。我が国の状況についてどんな質問にもお答えします。我々が何を達成しようとしているのか、二国間の協力だけでなく、ビルマと日本が民主主義の価値観を世界全体で推進するためにどんな協力ができるのかについて、お話をさせていただきたいと思っています。なんでもご質問ください。最善の努力をしてお答えします。私のすべての答えが必ずしも皆様のお気に召さないかもしれませんが、少なくとも正直な答えであることはお約束いたします。

司会 杉尾さん、代表質問をお願いいたします。

日本の若い方は、27 年前よりもっと高い関心をビルマに持っています

代表質問：杉尾秀哉・企画委員（TBS テレビ報道局解説室長） まず、15 年間の長きにわたって自宅軟禁されながら民主化を訴え続けてこられたアウンサンスーチーさんの不屈の闘志に敬意をあらわしたいと思います。

1 つ目の質問です。27 年ぶりの日本訪問ですが、当時と比較して、いまの日本の率直な印象というのはいかがでしょうか。

それから、また今回の訪問を契機にして、日本からどのような支援とか協力を期待されておられるのか、それについて伺いたいと思います。

アウンサンスーチーさん 最大の違いというのは、日本の若い方たちです。27 年前よりも、ビルマの事情について詳しい知識を持っています。温かいご支援を承っていただきましたので、私は大変励まされました。このことは、両国の関係の将来にとって、非常によい意味合いを持っていると思います。これが私の第一印象です。日本の若い方たちは、27 年前よりもビルマに対して高い関心を持っています。

日本からどのような協力を期待しているかということですが、2 つのレベルがあります。1 つは政府のレベル、2 つ目は日本国民のレベルです。私は常に政府よりも国民のレベルのほうを重視しております。しかし、日本政府から最大限のご協力もいただきたいと思います。日本政府はそれができる立場にあるからです。私の国に対する援助は、ビルマの政府を念頭に置くよりも、国民を念頭に置いていただきたいと思います。皆様

に常に申しあげているのですが、政権は常に交代いたしますけれども、国民はいつまでも国民です。

和解を実現する第一歩は法の支配の確立です

杉尾 次の質問ですが、民主化で経済発展が加速しております。その一方で、その影の部分として、民族対立、宗教対立というのが激しくなっている現状、そうした中で、国民の和解、それから海外に多数いる難民の帰還を進めるために、アウンサンスーチーさん自身がどういうふうに関わって、どういうふうに行動しようとされているのか、それについてお聞かせください。

アウンサンスーチーさん 和解は、常に重要な我が国の課題です。ビルマには多くの少数民族がいます。我が国は独立以降、一度たりとも完全に平和だったことはありません。平和はまだ実現できていません。軍事政権が 62 年に政権をとるクーデターの前までは、経済発展、経済的な成功は、ある程度実現できておりました。ですからもう一度経済的に成功することはできる、と確信しております。しかし、そのためには平和と統一が必要です。平和なくして、統一なくして、本当の意味での持続可能な経済的な成功は期待できません。経済的であれ、政治的であれ、社会的であれ、持続可能な発展のためには、平和統一が必要です。これが極めて困難なことなのです。

私は、法の支配委員会の委員長をしています。なぜかと言いますと、法の支配が重要であることを強く確信しているからです。これが我が国がとるべき道なのです。法の支配を確立させなければなりません。そうすれば、我が国の国民一人一人が安心感を持つことができます。安心感の持てる治安を実現できなければ、国民和解を実現することはできません。安心感を持て初めて、国民はお互いに話し合うことができ、意見を交換することができます。人々はお互いのことを信頼できなければ、語り合うことができません。

我が国の和解を実現するための第一歩は、法の支配の確立だと思います。

杉尾 少数民族の方々からは、もう少しスーチーさんに積極的になっていただきたいという、そういう声もあるようですが、いかがでしょうか。

アウンサンスーチーさん 積極的になるとは

どういうことなのでしょう。それぞれのグループは、それぞれの運動、それぞれの立場が唯一正しいと考えております。しかし、それでは国民の和解は実現しないと思うんです。互いの価値観や希望の妥当性を認識した上で、意見の隔たりを埋めていかなければなりません。

先ほどインタビューを受けたときに、私が自宅軟禁を解かれてから少数民族について、それほど言及していないと指摘されたんですが、しばしば発言しています。私の発言は、皆の満足を得るほど華やかなものではなかったかもしれませんが、私は華やかな発言というのは必要ではないと思います。必要な内容の発言をしたい。私の正直な気持ちというのをお話ししたいと思っています。

政治にとって最も重要なのは、国民に対して正直であることだと思うからです。国民は必ずしも気に入らないかもしれませんが、彼らをだましたことはありません。私のコメントがつまらないので、認めたくないという向きがあるのであれば残念に思いますが、少数民族、そして国民和解の問題については、たびたび発言してまいりました。しかし、話し方が退屈だったのかもしれませんが。法の支配、そしてさまざまな意見を尊重する必要性、そしてまた、多様性の中から統一を見出さなければいけないということをお話しています。もちろん、心を広く持ち、そしてまたほかの人の立場も自らの立場と同じように尊重するという条件付きですが。

政党のリーダーで国家のトップになりたくない人がいるでしょうか

杉尾 アウンサンスーチーさんは大統領就任に、今回の訪日の機会にも意欲をみせる発言をされておられる、その目的というか、何を達成されたいのかということと、大統領になるためには、2015 年の次期総選挙までに、いまの憲法を改正する必要があるとされています。その目的達成のために、どういう道筋を描いていらっしゃるのか、お聞かせください。

アウンサンスーチーさん 大統領になりたいといったことについて、皆さんが関心を持たれていることは承知しています。政党のリーダーで、国家のトップになりたくないという人がいるでしょうか。国の指導者あるいは政府のトップになりたくないのであれば、どうして党首になるのでしょうか。世界中どこでも、政治にはうわべだけの謙虚さがあるように思います。多くの報道機関は、

率直に「はい、大統領になりたいのです」というと、意外に思うかもしれません。しかし、大統領になれば、信じる政策を実現することができるのです。しかし、いみじくもあなたのご指摘になったように、一定の憲法の部分は、意図的に私が大統領になれないようにしているところがある、と思っています。どこの国の憲法であったとしても、一人の者を念頭に置いてはいけません。ある特定の立場につかせないように、あるいは、ある人を特定の立場に就かせるように、憲法は書かれるべきではありません。だから、異議を申し立てています。

異議を申し立てているのは、何も私に対抗しているからではありません。そうではなく、一人の人間をターゲットとしていることが最も憲法に反するからです。憲法は、国全体のことを考えて書かれるべきです。現行憲法を改正するためには、75%を超える多数の賛成が必要です。これは、憲法の全てについてではなく、憲法の最も重要な部分の改正です。その変更には、75%を超える議会の賛成票が必要です。議会の25%は司令官が任命する軍の議員ということです。いつも言っていますが、少なくとも一人の勇気ある兵士およびそれ以外のすべての非軍人議員の賛成がないと、改正したいと思っている部分の改正ができないということです。

つまり、憲法を改正するためには、軍との合意がなければなりませんし、実際にそれを希望しています。異なる勢力と合意し、我が国に変化を起こしたいと思っています。それを私は国民和解と呼んでいます。それは、つまりお互いに語り合うことができ、意見の違いを整理して、調和ある和解に至ることを可能にする力量のことなのです。常に申しあげているように、我が国は交渉して妥協に至る文化が貧しいと思います。

しかし、そのために我々は努力を続けなければなりませんし、私自身も最善を尽くして努力しています。

司会 いまのお答えの中で、1つだけ追加で伺わせていただけたらと思います。支援について、政権だとか政府ということを念頭に置くのではなくて、国民を念頭に支援してほしいとおっしゃいました。そこにはやはり軍人がまだ支配的な政権であるというところがあるのかなと思うんですけれども、憲法にしても、国会のあり方にしても、いまそういう状態だということはもともとご存じだったと思います。政治家になられてあらた

めて、すごく障壁だというふうに感じられている点というのは、多くあるんでしょうか。

アウンサンスーチーさん 最大の障害というのは、軍事独裁政権を当たり前のように思っている思考様式、ものの考え方（mindset）です。問題は軍の考え方ではありません。軍の考え方というのは、規律がしっかりしていて、指揮系統を守るといことです。しかし、軍事独裁の考え方は完全に別物です。

3年前の軍事政権のメンバーの多くが、いまでも民政移管後の政権に残っていますので、今ビルマを支配している人たちの考え方というのは大きく変化しなければいけません。ビルマに対する援助というのは、政府中心ではなくて、国民中心でなければいけないというのは、いまの政府のあり方を念頭に言っているのではないのです。どのような政権になっても、常に援助、支援というのは、原則として、政府中心ではなく、国民中心でなければいけないと思います。我々が政権を取っても、援助は国民中心であるべきです。

しかし、真に国民の代表であるような政権であれば、利害も国民と全く一致するというふうに思います。

司会 では、会場の皆さんから質問をいただきたいと思います。

質問 日本の支援についてです。財政的な支援をミャンマーに対して行っています。ほかの国々が制裁を科している間にも、日本は援助を続けていました。自宅軟禁をされている間に、日本のことをどう思っておられたでしょうか。貴国が民主国家を宣言した後にも、日本は500億円の援助を発表しています。民主化実現のためにいい方向に機能するのでしょうか。日本の支援で、今後最も期待しているのは何でしょうか。

援助について、日本政府は議会、野党とも協議してほしい

アウンサンスーチーさん 世界各国の多くの国々が軍事独裁に対してどのように対応したか。確かに各国間で違いがありました。確かに西欧の国々はおっしゃったとおり、制裁を科していました。その間、日本は引き続き援助を続けていました。

しかし、申しあげたように、私が最も懸念して

いたのは、援助、支援は国民に向かうべきであり、政府の権力維持のために使うべきでないということです。

日本の援助は、ほとんど国民に向かったと思います。しかし、より慎重にする必要があります。援助は、本当に国民が必要としているものであるべきです。この点について、日本政府には、単に行政府に相談するだけではなく、議会とも、我々野党を代表する者とも協議をしていただきたい、と思います。せっかく我が国で援助をいただいても、行政府および立法府、および野党の対等な関与がなければ、援助が正しく使われない可能性があります。

質問 2年前にテインセイン政権ができて、その後、スーチャーさんがテインセイン大統領に会われて以降、いわゆる改革というのが急速に進んだと思います。テインセイン政権2年間のレビュー、これの評価を聞きたい。特にテインセイン大統領個人を、改革者としてどう評価するかをお聞かせください。

アウンサンスーチーさん 私は政治家を個人として評価するということは控えております。政治家の実績に基づいて評価するだけです。そのような観点から、テインセイン政権の改革の実績を評価させていただきます。

この改革プロセスの弱みというのは、しっかりした構想に欠けているということだと申し述べてきました。きちんとした改革政策がないように思えますし、我が国にとって、いま何が必要なのかという優先順位づけが行われておりません。外国の援助が現状より多ければ多いほどいいというものではないのです。

まず初めに、国にとって何が最も必要なのか、そのニーズをどう満たしていったらいいのか決めなければなりません。それが現政権の弱点です。

立法府に関しては、私も議員をしておりますけれども、いままでの実績に関して、非常に驚きかつ喜んでおります。ほかの人にも申しあげておりますが、議席全体が620議席もあるにもかかわらず、この議会には45人しかNLDのメンバーがいません。しかし、我々は野党としては最大野党です。与党は、2010年に82%を超える勝利をおさめました。我々は少数ではありますが、野党としてかなりの実績を治めることができました。与党USPD（連邦團結発展党）を含む多党の協力を得て可決された動議もたくさんあり

ます。また、立法府の上院議長、下院議長からもそういった支持をとりつけることができました。

議会の透明性と民主的プロセスも、この1年間で改革が進みました。それはNLDがまさに議会に参加したからだと思います。しかし、かなりの部分というのは、下院の議長のおかげでもありまして、民主的方法や手続きを熱心に推進してくれています。これは時間の経過とともにさらに進展をみると期待しております。

問題は司法府です。私自身、法の支配委員会委員長として問題だと思っていますが、更に国にとっても大きな問題です。司法府が行政府の関与から独立していないのです。実際には司法府は行政府に完全に従属しています。これは大変危険なことです。独立・公正な司法府がなければ、真の法の支配は達成することができませんので、それに向かつて、我々は全力で努力し邁進しなければいけません。

質問 覚えていらっしゃるでしょうか。前回、NLDの本部でお目にかかりました。半年前です。そのときのことをよく覚えております。あなたは、いまよりも懐疑的でした。いまのほうが楽観的にみえます。その当時、まだご自身、立候補するかどうか、選挙について、悩んでおられました。

2つの問題がある、全ての政治犯の釈放、および抑圧的な軍部の少数派に対する行為が問題であるとおっしゃっていました。いま少し楽観的になっていらっしゃるの、この問題が何らかの形で解決されたからでしょうか。それとも、まだ政治犯はビルマに残っていて、まだ少数民族に対する残虐行為があるのでしょうか。

和解の話をするときに、そのような和解は歴史上多く発生しています。マンデラ方式の解決策をお考えでしょうか。国家和解委員会を設置し、責任は認めるけれども、免責する、訴追はしない。あるいはアルゼンチン方式でしょうか。将軍を訴追し、服役させるという方法でしょうか。

すべての勢力の間の信頼がまだ実現していません

アウンサンスーチーさん なぜそのころより楽観的になっているか、先ほどお答えしたと思います。

議会が、想像していたより民主的であったからです。おかげさまで、議会で少数派でありながら、思っていたよりより多くのことが実現できたためです。

確かに、完全に納得していたわけではありません。司法府にも行政府にも、問題はあります。おっしゃった2点、政治犯の釈放、および民族の対立、この2つは解決できたとは思っていません。いまだに政治犯は残っています。NLDの計算によると、まだ200人ほど受刑者が残ってしまっていて、この人たちは、良心の囚人だと思っています。

少数民族の和平についても、実現はできていません。国民和解がなぜ必要であるのか。私にとっては、国民和解はただ単に民族の平和だけではありません。そうではなく、文民と軍との間の和解も含まれます。信頼感を醸成することが必要で、善意をお互いに構築することが必要です。全ての勢力間での信頼が必要です。それがまだ実現できていません。

かつ、おっしゃった解決策、アルゼンチン方式か、マンデラ方式つまり南アフリカ方式か、についてですが、ビルマの方式を考えなければいけません。ビルマ国民は猫かぶりなどしませんから、ほかの2カ国の方式よりも我々のほうがいいだろうと信じているのではないのでしょうか。

質問 ビルマの経済を持続可能な成長に導く、とおっしゃいました。それで質問がありますが、いまのビルマの経済は、天然ガスなどの資源に依存していると思うんですが、今後、持続可能な成長を維持するためには、どのような産業、あるいはどのようなインフラ等が必要になるか、教えてください。

失業した若者が希望を失うことが心配です

アウンサンスーチーさん ビルマは、すぐれて農業社会です。国民の60%が農村地域に居住していて、農業で生計を立てています。だからこそ、農業セクターを適正な形で発展させなければ、持続可能な開発は不可能です。

私が若干懸念しておりますのは、人々の農業に対する見方がどうも旧式であることです。農業については、新しい捉え方をしなければいけないと常に言っています。食料安全保障の観点から、21世紀の農業を捉えなければいけない。20世紀のように、大規模な経営、そして単一作物という形で農業を捉えるのはいけません。単一作物で農業が支配されることには反対です。多くの対策が必要だと思っています。

しかし、経済を成長させるためには、何よりもまず雇用を創出しなければいけません。ビルマの失業率は、特に若者の間では高くなっています。

繰り返し強調していますが、これは大変危険な状況です。失業している若者は、国の未来を危うくします。失業問題自身を心配しているのではなく、若者が希望を失ってしまうことを心配しているのです。若者が未来に対する希望を失い、自信を失ってしまうということ、尊厳のある人間として暮らすことを社会が許さないと感じてしまうことが危険なのです。そうなる持続可能な強力な社会をつくることはできません。

ビルマに対する経済援助を供与する際には、雇用の創出、特に若者に対する雇用の創出、都市部に加えて、特に農村地域における雇用の創出を重点に考えてほしいと思います。

質問 総理の奥様の安倍昭恵さんがミャンマーに学校をつくる運動をしていて、それでわかったことは、ミャンマーでは寺子屋があって、お坊さんが子どもたちに字を教えていて、貧しいのに識字率が90%で、寺子屋の役割がすごいと気がついた。これから、国民の知的レベルをどんどん高くしていかなければいけないと思うのですが、教育についてのお考えを伺いたい。

アウンサンスーチーさん まず、識字率は90%を超えておりません。識字率の定義が非常に限定されたものになっております。その定義によると、90%を超えるかもしれません。ところが、本当の意味で、国民が本当に読んで、読んでいる内容が理解できるかどうか。例えば、薬の飲み方を読むことができるか、そうすると、ビルマの識字率は90%にはなりません。

寺子屋(Monastic Schools)は以前から重要な役割を果たしてきました。議会では、今後、寺子屋が子どもたちの教育においてもっと大きな役割を果たすことができるように、寺子屋の教員に給与を払うことを検討しています。現在、寺子屋の先生にお金を払っているのは、政府ではなく、地域なのです。我々はそれを変更しようとしています。寺子屋がより大きな役割を子供の教育で果たすことができるように、議会は必要な措置をとっております。

さらに、つけ加えます。我が党では、無料の学校のネットワークを始めております。なぜかと言いますと、政府による教育は無償であるべきだからです。つまり、子どもたちは公式には学校の費用を払う必要がないことになっているはずですが、そのかわりに、名目は違うのですが、寄附金等を求められております。ですから多くの貧しい

親は子どもを学校に通わせることができいてません。我が国の教育制度については幾つかの課題がありまして、大変努力をしてそれを変えようとしております。

いま、議会は全国教育計画を検討しています。これは絶対に必要です。教育計画の草案ができれば、社会が教育で何を必要としているか、より詳細に議論することができるでしょう。

大国が小国を侵略する時代ではない 隣接する2つの大国を心配していません

質問 20 年来、ビルマの研究をしておりまして、ビルマの国境を訪問したとき、主権の問題がたくさん見受けられました。主権というのは、歴史をみても、お国にとっては常に問題だったんですけれども、その将来を、中国その他東南アジアの近隣諸国に囲まれている中で、どのようにみえていますか。

アウンサンスーチーさん 我々の隣国が大国であるということに心配したことはありません。インドとか中国の存在を無視することは難しいと思いますが、ビルマが 1948 年に独立を達成したときには、すでに中国やインドと隣接していました。地理的な条件が変わったわけではないのです。

しかし、当時は若い民主主義国家として多くの問題を抱えていたのです。全国に反乱が勃発していたし、第二次大戦後の後遺症がまだ色濃く残っていました。それにもかかわらず世界中のいろいろな国と良好な関係を築いたのです。冷戦時代を通じて中立を保つことができました。

軍事政権が支配する前には、欧米諸国、中国、そしてインドとかなり良好な関係を築いていたのです。我が国は完全とは言えないにしても民主国家であり、欧米とも、インドとも近い関係というのを築いていましたが、世界の中でも、中国の共産主義政権を承認した最初の国の 1 つだったのです。ですから、心配しておりません。

というのは、我々の時代は大国が小国に侵略してしまうという時代ではないからです。政治的な、そのような野蛮な行為はもう認められません。隣接する 2 つの大国、そしてフランスのような遠い国とも良好な関係を築けると確信しています。

質問 イスラムについて、お尋ねします。冒頭おっしゃったように、一部の批判の中には、少数

民族に対する暴力について、ご自身が十分に発言をしていない、特にラカイン州、そして、いまでは国の中心部に広がっていることについて十分に批判をしていないという声があります。イスラム教徒の人たちは NLD の主たるサポーターです。どのようなメッセージをイスラムである国民に対してお持ちでしょうか。貴国の中にいるイスラム教徒、特に宗派間の争いがある中で、命の危険を感じている人についての質問です。追加ですが、ロヒンギャの人たちをミャンマーの国民と考えますか。

国民が互いの違いを理解するためには安心感が必要です

アウンサンスーチーさん 暴力行為については、誰が行ったとしても、誰に対してでも反対です。その暴力行為を行っているのがイスラム教徒であれ、仏教徒であれ、キリスト教徒であれ、全く関係がありません。完全に反対です。とりわけ政治に関わる暴力行為には常に反対してきました。極めて残念なことですが、我が国の人々は意見の相違を、暴力に頼らずお互いに相談をして解決することができません。常にはっきり言っているのですが、いかなる人権侵害、あるいはいかなる暴力的な行為も、統一された平和な社会には有害なものです。受け入れられるものではありません。

ロヒンギャ族が我が国の国民であるか否かは、彼らが現在の公民権法を満たせるのかどうかによります。82 年の法律に基づいているビルマにおける公民権法は公正ではない、という人もいますが、それはまた別の問題です。

いま現在、確認しなければならないのは、現行の法律の下で市民権を得る資格を持っている全ての人は、市民権を与えられているということです。いったん市民権を与えている場合に、それに相当する権利が与えられているかどうかをまず確認しなければなりません。その次の段階として、市民権法を再検討し、その内容が国際基準にのっとっているかを考えなければいけません。どこの国でも、既存の法律を適用するという権利はあると思います。

しかし、どの国であったとしても、その法律自体が国際基準にのっとっていない可能性を考える責任があります。それについて、我が国の政府は勇気を持って考えなければいけません。正面から市民権の問題に取り組み、公正であるかどうかを考えなければいけません。

ビルマのイスラム教徒についてですが、来日の直前に一部の指導者に会いました。このような宗派間の問題について、話しました。残念なことに彼らはビルマ以外の国を知らず、ほかの国にも同胞がいるということを理解していません。悲しいことですが、彼らはビルマ国内でも孤立してしまっているのです。

異なる見解を持つ人を受け入れることに慣れていかなければなりません。

前に申しあげたように、国民が互いの相違を理解するためには、安全であるという安心感が必要です。お互いに語り合うことができるほどの安心感が必要です。家を出ることが不安であり、毎回家から出るたびに、別のコミュニティの誰から攻撃を受けるかもしれないという恐怖感がある時に、座って意見の相違を理解しあうことができるでしょうか。だからこそ、私は法の支配を強調しています。

私の態度はつまらないと言われるのでしょう。法の支配は全然エキサイティングではないからです。しかし、法の支配はどうしても必要です。

質問 質問は、国名についてです。聞いていると、ずうっと「ビルマ」と言っておられる。数年前に「ミャンマー」という国名に変えたときに、日本のジャーナリズムの一部には、「ミャンマー」というのは軍事政権がつけた名前だから、これを使ってはいけないと。欧米のジャーナリズムにもそういう論がありました。ところが、日本の元駐ビルマ大使の一人がお書きになった本によると、「ビルマ」という名前は、そんなに歴史のあるものではない、これはむしろイギリス植民地主義者たちがつけた名前だと。

それで、私も半年ほど前に、在日英国大使と会ったときに、ミャンマーという質問をしたら、彼の答えはすべて「ビルマ」と返ってきたんです。そこで、アウンサンスーチーさんの心の中に、いまだに「ミャンマー」という呼称は好ましくないんだ、「ビルマ」が正しいんだと思っておられるのかどうか、そこを聞きたい。

「ミャンマー」は軍事政権が国民の意思を確かめず、突然変えた英語国名だから、異議を申し立てます

アウンサンスーチーさん 私が常にビルマを「ビルマ」(Burma)と呼んでいる理由というのは次の通りです。軍事政権が英語の名前、国際的な

国名を「ミャンマー」(Myanmar)に変える前は、日本が国内ではニホン、英語ではジャパンと呼ばれるように、我々は、国内では「ミャンマー」を使っていました。「ミャンマー」はビルマ語です。しかし、外国では、独立以前から、また独立後も「ビルマ」という国名を使っていたのです。

軍事政権がある日突然、国名をその日以降「ミャンマー」と変えると発表したのです。国民の意見を聞いたわけではない、それが、私が最大の異議を申し立てたい点です。軍事政権が選択した国名であり、国民の意思を一切確かめなかったということに異議を申し立てます。国民がこの国名を受け入れられるかどうかということは一切問わなかったということ。これが理由の1つです。

2番目の理由は、国の名前の説明が、事実上、正確ではなかったということです。彼らは「ミャンマー」はビルマのすべての少数民族を含めているといいました。一方、「ビルマ」というのは、「バマー」(Bamar)がもともとの言葉なのですが、ビルマの民族グループのみに限定されていると説明したのです。しかし、これは本当ではありません。「ミャンマー」は「バマー」の文語表現(literary form)なので、ミャンマーといってもやはり、ビルマの民族グループのみに限定されているのです。ですから、国名を変更する理由は正確ではないのです。

日本人の方は「ビルマ」(Biruma)と呼んでいるのですけれども、この「ビルマ」の発音は「ミャンマー」の発音よりもずっといいと思うのです。「ビルマ」という響きのほうが、日本人の方が発音される「ミャンマー」、ほかの外国人の方が発音する「ミャンマー」の響きよりもずっといいのです。「ミャンマー」はとっても発音しにくいのです。欧米人が「ミャンマー」と発音すると、ちょっと違っているのです。しかし、「ビルマ」の発音はとってもいいのです。

チャイナ、インディア、ジャパンは西洋人が与えた名前だが、それぞれの国に自信があるから受け入れたのです 私は「ビルマ」と呼び続けたい

「ビルマ」が、植民地主義者、すなわち外国人によって押しつけられた名前だという主張ですが、それでも、「ジャパン」という呼び方も日本人が自ら選んだものではありません、でも、日本人は自らの実績に自信を持っているので、その国名を受け入れることができたと思います。

軍事政権が「ビルマ」という名前を拒絶したのは、自信がなかったからだと思うのです。アジア

で最も強力な国、中国、インド、日本といった国々を考えますと、外国で呼ばれている「チャイナ」「インディア」「ジャパン」は、西洋人から与えられた名前であり、ネイティブな名前ではありません。でも、それぞれの国、文明、そして近代史の実績に自信を持っているので、そうした国名を受け入れることができたのだと思います。私たちも「ビルマ」という名前を受け入れてもいいのではないのでしょうか。

かといって、それに固執しているわけでもありません。私が「ビルマ」と言いたいのに、「ミャンマー」と呼ぶよう強要することに、私は反対なのです。私の国を「ビルマ」と呼んではいけないという法律はありません。私自身は、望む限り、私の国を「ビルマ」と呼び続けたいと思っています。

ありがとうございます。（拍手）

司会 ありがとうございました。時間が過ぎてしまいましたので、ここで質問を受けるのは最後にしたいと思います。

ゲストブックに、先ほど控室でアウンサンスーチーさんに書いていただきました。ここには、「日本との協力の将来に期待しています」と添えていただきました。また、きょう、4月17日はお国の正月ということだそうで、それも書いてくださいました。

クラブからの記念品として、クラブ特製の風呂敷を差し上げたいと思います。

アウンサンスーチーさん ありがとうございます。（拍手）

（文責・編集部）

（注： 記者会見の英語のトランスクリプトは日本記者クラブのウェブサイトでアクセスできます。この日本語版は、同時通訳の日本語をもとに、英語のトランスクリプトを参照して日本記者クラブ事務局で作成しました。